

研究業績

へき地学童の耳鼻咽喉検診成績 (第10報)

富山県農村医学研究所 豊田 文一
金沢大学医療技術短期大学部 津田 光世
北角 栄子

はじめに

私どもは、昭和44年より10年間にわたり、へき地学童の耳鼻咽喉科検診を実施してきた。その地域環境は、社会構造の変化とともに過疎の一途を辿り、とくに学童において顕著で、当初その数は430名であったが、10年後の今日、約40%の減少をみている。私どもの検診成績も、過去10年間の推移をみると、昭和47年頃より急激な変動をみせ、慢性鼻炎、副鼻腔炎は、著しく減少し、難聴も極めて低率になってきた。これには、各種の要因が挙げられるが、検診の成果と地域の近代化による栄

養の改善が、その主なるものと考えられる。このことについては、昭和54年、第28回日本農村医学会総会において10年間の推移に関して、私どもの見解を述べた。

私どもは11年目になる昭和54年度も引き続き本調査を続行したので、その成績を記述したい。

検査成績

昭和54年5月、中新川郡上市町のへき地小学校5校、市街地に所在する上市中央小学校学童の検診を行ったが、過去10年間と同様の対象校である。

表1 学校別、学年別学童数(調査対象)

学校名	1	2	3	4	5	6	計	%
上市中央小学校	165	192	175	166	204	195	1,097	79.5
柿沢小学校	18	28	21	23	19	25	134	9.7
大岩小学校	2	3	4	8	7	4	28	2.0
白萩東部小学校	0	1	1	4	3	2	11	0.8
白萩西部小学校	16	19	16	12	13	7	83	6.0
白萩南部小学校	3	4	6	4	6	5	28	2.0
計	204	247	223	217	252	238	1,381	

表2 上市中央小学校

病名	耳	中	難	鼻	鼻	慢性	扁桃	扁桃	ア	ア	咽	そ	罹	人
学年	垢	耳	聴	炎	た	副	肥	炎	テ	レ	頭	他	患者	数
					け	鼻	大	炎	ノ	ギ	炎		数	
1				6	4	5	10	1	2	28	165			
2				16	6	9	4	2	1	38	192			
3				12	1	5	5			23	175			
4				8	5	4	7			24	166			
5			1	8	2	5	10	1	1	27	204			
6				7	1	6	7	6		27	195			
計			1	57	19	34	43	10	4	168	1,097			
			0.1	5.2	1.7	3.1	3.9	0.9	0.4	15.3				

表3 柿沢小学校

病名	耳	中	難	鼻	鼻	慢性	扁桃	扁桃	ア	ア	咽	そ	罹	人
学年	垢	耳	聴	炎	た	副	肥	炎	テ	レ	頭	他	患者	数
					け	鼻	大	炎	ノ	ギ	炎		数	
1				1				1					2	18
2				5	2	3	1	2			1	14	28	
3				1	1	1							3	21
4				1	1	1							3	23
5				2				1					3	19
6								1	1				2	25
計				10	4	5	4	3			1	27	134	
%				7.5	3.0	3.7	3.0	2.2			0.7	20.1		

被検学童は1,381名、へき地学童275名、市街地学童1,097名、合計1,381名で、市街地学童数は、ほとんど変動はないが、へき地学童数は、前年に比して約10%の減少をみている。(表1)

各小学校における疾患罹患別、罹患率は、

表4 大岩小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 た け	慢性 副 鼻 腔 炎	扁桃 肥 大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	アレルギー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	人 数
1							1						1	2
2														3
3														4
4							1						1	8
5														7
6								1					1	4
計							2	1					3	28
%							7.1	3.6					10.7	

表5 白萩西部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 た け	慢性 副 鼻 腔 炎	扁桃 肥 大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	アレルギー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	人 数
1				1								1	2	16
2						1							1	19
3							1	1					2	16
4								1					1	12
5													0	13
6							1						1	7
計				1		1	2	2				1	7	83
%				1.2		1.2	2.4	2.4				1.2	8.4	

表6 白萩東部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 た け	慢性 副 鼻 腔 炎	扁桃 肥 大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	アレルギー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	人 数
1														0
2														1
3														1
4														4
5														3
6														2
計													0	11
%														

表7 白萩南部小学校

病名 学年	耳 垢	中 耳 炎	難 聴	鼻 炎	鼻 た け	慢性 副 鼻 腔 炎	扁桃 肥 大	扁桃 炎	ア デ ノ イ ド	アレルギー 性 鼻 炎	咽 頭 炎	そ の 他	罹 患 者 数	人 数
1				1									1	3
2													0	4
3				1									1	6
4													0	4
5													0	6
6													0	5
計				2									2	28
%				7.1									7.1	

表示の如くである。

上市中央小学校(表2)、柿沢小学校(表3)、大岩小学校(表4)、白萩西部小学校(表5)、白萩東部小学校(表6)、白萩南部小学校(表7) ●は表に示す通りである。

総 括

学校保健の面から耳鼻咽喉科疾患として重視されるのは、難聴、慢性鼻副鼻腔炎及び扁桃疾患(慢性扁桃炎、扁桃肥大症)である。今回の検診をみると、昨年度に比して、罹患率は市街地学童は僅かに増加し、へき地学童はやや低下している。昨年はへき地では高率であったが、本年度はその比率が逆転している。難聴は市街地学童でただ1例認められただけで、皆無といってもよい。10年前15%に認められたが、隔世の感がある。慢性鼻炎はへき地は市街地に比較して低率、慢性副鼻腔

炎は、両者略同率であるが昨年に比して減少している。10年前は10%前後であったが、今や鼻炎では5%前後、副鼻腔炎では2%以下となり、その推移は特徴的である。扁桃肥大症は、横ばいの比率を示しているが、慢性扁桃炎は、かなり増加している。(表8)。なお鼻副鼻腔炎の分泌物に含まれる好酸球の検索を行った。これは6年前より行ったもので、エオジノステン(トリキ)を使用し、その判定は同様の方法をとった。その陽性率は、市街地において激減している。この低下は、逐年的にその傾向がみられたものの、本年度急減

表8 市街地、へき地別疾患別検査成績表

		耳	中	難	鼻	鼻	慢性	扁桃	扁桃	ア	ア	咽	そ	罹	人	
		垢	耳	聴	炎	た	鼻	肥	炎	デ	レ	頭	の	患者	数	
上市中央小学校	人			1	57			19	34	43		10		4	168	1,097
	%			0.1	5.2			1.7	3.1	3.9		0.9		0.4	15.3	
その他の小学校	人				13			5	8	8		3		2	39	284
	%				4.6			1.8	2.8	2.8		1.0		0.7	13.7	
合 計	人			1	70			24	42	51		13		6	207	1,381
	%			0.1	5.1			1.7	3.0	3.7		0.9		0.4	14.9	

したが、その要因についての判断に苦しむ。このことについて改めて検討してみたい。これに対して、へき地学童においては、逐年的に変化は少ないが、本年度も同様である。

(表9)。

表9 鼻汁分泌液中の好酸球検査成績

上市中央小学校	+	0	} 1	1.1%
	+	1		
	±	17	} 91	98.9%
	-	74		
その他の小学校	+	0	} 4	17.4%
	+	4		
	±	11	} 19	82.6%
	-	8		
合 計	+	0	} 5	4.3%
	+	5		
	±	28	} 110	95.7%
	-	82		

私どものへき地学童の耳鼻咽喉科検診は11年目に当たり、同一人の検索、同一地域で施行したことに意義があり、しかも疾患は、逐年的に減少をみたことは事実である。これも適切な事後処理、さらにへき地の地域生活環境の改善が、かかる成果をもたらしたものと推測される。

む す び

私どもは、昭和54年も引き続き、中新川郡上市町を中心として、へき地学童の耳鼻咽喉科検診を実施した。

これを要約すれば、

(1) へき地学童 275名、対照として中央小学校学童 1,097名について耳鼻咽喉科検診を

行った。

(2) 難聴は、市街地学童に1名認めただけで、へき地学童では皆無であった。

(3) 慢性鼻炎は、へき地学童4.6%、市街地学童5.2%で、前年に比して大差はない。

(4) 慢性副鼻腔炎は、へき地学童1.8%、市街地学童1.7%で、略同率、昨年に比して減少している。

(5) 慢性扁桃炎は、へき地学童2.8%、市街地学童3.9%で、やや増加している。

(6) 肥扁桃肥大症は、へき地学童2.8%、市街地学童3.1%で、昨年に比してへき地では減少している。

(7) 鼻副鼻腔炎の分泌物の好酸球検索では、へき地学童の陽性率17.4%で昨年より僅かに低下しているが、市街地のそれは1.1%と急減している。この要因について判断に苦しむ所であり、更に継続的調査により究明したい。

以上の成績をえたのであり、これを10年前に比較すると上述疾患は、それぞれかなりの高率を示していたが、10年間の経過は、それぞれの疾患の減少をみている。これは引き続いて毎年検診の成果の一因であるかも知れない。しかし検診の事後処理、関係者への啓蒙、さらにへき地の環境変化が、その地の疾病構造に変化を与えているのではなからうかと考えられる。

なお本調査に当たり、上市町当局並びに上市厚生病院越山健二院長の御援助に感謝するものである。

文 献

- (1) 豊田文一、津田光世、北角栄子：へき地学童の耳鼻咽喉科検診成績 第9報
富山県農村医学研究会誌 第10巻
- (2) 豊田文一、津田光世：へき地学童の耳鼻咽喉科検診における10年間の推移
日本農村医学会雑誌 第28巻第3号